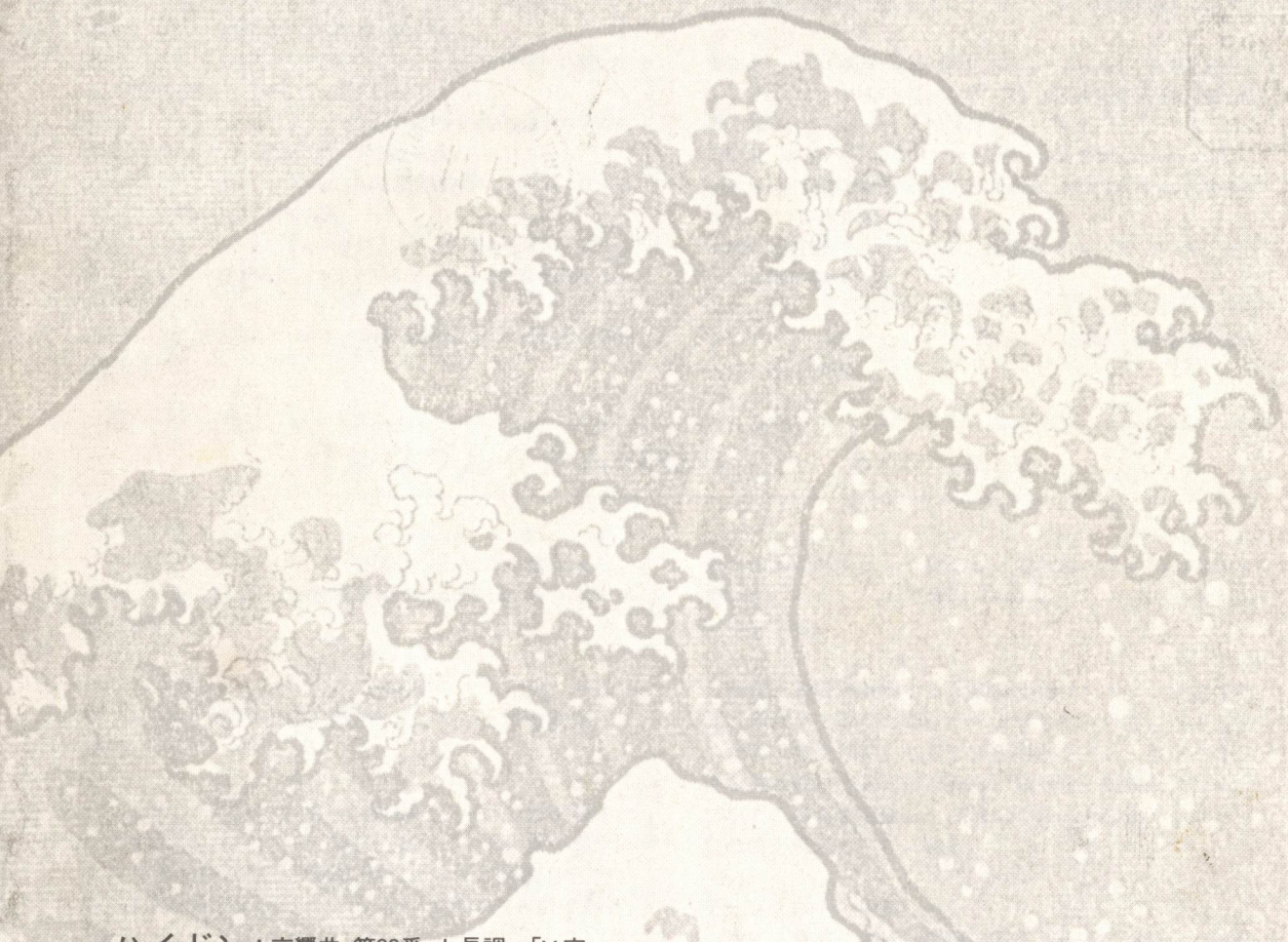
アマチュアオーケストラ

新交響楽団第117回演奏会

CLAUDE DEBUSSY

LA MER

指揮　今村　能（客演）



ハイドン：交響曲 第88番 ト長調 「V字」
Haydn：Symphony No. 88 in G major

ドビュッシー：交響詩 「海」
Debussy：La Mer

ルトスワフスキ：オーケストラの為のコンチェルト
Lutoslawski：Concerto for Orchestra

1987年9月26日（土）午後7時　新宿文化センター大ホール

「海」初版の表紙
（ジャン・バラケ著「ドビュッシー」白水社より）



今村　能（ちから）　（客演）

1954年　1月29日　大阪生。東京・玉川学園に学ぶ。
1976年　3月　国立音楽大学卒業
1977年　11月　カラヤン・コンクール・ジャパン　第3位。
1978年　3月　桐朋学園大学指揮科研究生修了。
1978年　9月より1981年2月までカラヤン・アカデミーに籍を置き、研鑽を積む。（ベルリン・ザルツブルク）
1980年　5月より“ベルリン・フィル12人のチェロ奏者たち”の練習指揮者並びにレコーディングの指揮を行う。
1980年　7月　グィド・カンテルリ記念指揮者コンクール・ファイナリスト（於ミラノ・スカラ座）
1980年　7月　グィド・カンテルリ・コンクールの一環として、ミラノ・スカラ座管弦楽団、ミラノ・イタリア放送交響楽団とコンサートを持つ。
1981年　7月より東京アカデミー合唱団指揮者として合唱団の育成に力を注ぐ。
1981年　12月　NHK・テレビオペラで活躍。
1982年　4月・5月及び1983年4月　キングレコード・ファイヤーバードレーベルへLP 8枚をレコーディング。（東京佼成ウィンド・オーケストラ）
1983年　6月　武満　徹氏企画　Music Today '83「今日の音楽・11」で、フランソワ・ベルナール・マーシュ作品演奏会を指揮し絶賛を博す。
1983年　12月　ポーランド・カトヴィッツェで開かれた第2回フィテルベルク国際指揮者コンクールに優勝。特別賞を受賞。（最優秀オーケストラ伴奏賞）
現在、日本各地のオーケストラ、およびポーランド、デンマークを中心に指揮活動を行う。
これまでに、ヘルベルト・フォン・カラヤン、フランコ・フェラーラ、ミラン・ホルヴァート、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、高階正光の各氏に師事。

ザルツブルクからパリへ　——　新響のめざすもの

「ハイドンはアンサンブルが命。」とよく言われる。仲良く、調和して、の意味を持つ Ensemble はフランス語である。

そこで問題提起。ハイドンが活躍していた頃、本家フランスのオーケストラのアンサンブルはどの程度だったのだろうか？

ハイドンの作品は1780年代の初めからパリで演奏されており、人気が高かった。実際、当時パリを代表するオーケストラから交響曲の新作がハイドンに依頼されている。これが第82番から87番の「パリ交響曲」6曲である。

ハイドンのオーケストラのアンサンブル

ハイドンは自分のオーケストラを持っていた。エステルハージ候爵の楽団である。編成はフルート1本、オーボエ、ファゴット、ホルンが各2本でクラリネットは無しの30人位であった。交響曲第3番から92番の約90曲は、おおむねこの編成で書かれている。

ハイドンは副楽長として赴任した29歳からロンドンに招かれる58歳迄の約30年間、このオーケストラを指揮している。社交家のハイドンは当初から、効果的なソロ部分を作品の随所にちりばめて、楽団員の心を手中に収めていた。しかし、その練習は相当きびしいものであったようである。

今宵、新響が演奏する交響曲88番はハイドン56歳の作品。オーケストラのコンサートマスターであったトストのために書かれた。ハイドンの厳格なトレーニングを30年も受け続けてきたのだから、おそらく見事なアンサンブルでこの曲を演奏したに違いない。その後、トストはこの曲を携えてパリに移る。

モーツァルトの手紙

さて、最初に掲げた疑問に答えよう。1778年、23歳のモーツァルトはパリのオーケストラを聴き、そのアンサンブルについて、ザルツブルグの父親に次の様な手紙を書き送っている。

「ここではオーケストラはこんなことまでやります。こんなことがあり得るのでしょうか！彼らは本当に、同時に揃って出るのです！」　（Vn. 白木善尚）

使用楽譜：Haydn–Mozart Presse
作曲年代：1787
楽器編成：フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

ドビュッシー　三つの交響的素描（エスキス）　「海」

ドビュッシーは海が好きだったのだろうなあ。折々に訪ね、眺めた海の色、海の音、海のうねり、海の輝きが、この作品をつくっているのです。だから、海を見たことがない人でなければ（いやもしかしたらそういう人でさえ）、この曲を聴けばまざまざと海の景色を思い描けることでしょう。まさに音画（おんが）く。印象派の絵のようね……などと、うっとり聴くもよし。まずはイマジネーションの助けに、３つの楽章の題名と聴きどころを記しておきましょう。

Ⅰ．海上の夜明けから真昼まで

「11時45分のあたりがいちばんイイ」と言われております。おそらく、最後の方でホルンが吹き出すコラール（このメロディーは３楽章で戻って来るのです）のことでしょう。それと、午前10時ごろ、チェロが４パートに分かれて朗々と我が世の春を謳歌するところも聴きのがせません。

Ⅱ．波の戯れ

“戯れ”だけあって、きらきらはしゃいでいたかと思うとシナをつくったり、たゆたっていたかと思うと突然ぴちゃっとはねたり、表情がくるくると変わります。

Ⅲ．風と海との対話

１楽章同様ティンパニのトレモロで始まりますが、今度のは嵐の前ぶれ。海を波立たせ、波を岩にくだけ散らす風の音がきこえるでしょう。

ドビュッシーが「海」を書いていた頃、彼の身辺は相当ゴタゴタしておりました。献身的な妻リリーを捨てて、富裕で才色兼備、歌も上手だった人妻エンマのもとに走ってしまったドビュッシーに世間は冷たかった。多くの友人が彼から離れ、「金に目がくらんだドビュッシーにはもう良い作品は書けまい」とまで言われていたのです。そうした人々の声を充分知っており、また自ら、1903年に大成功を博した歌劇「ペレアスとメリザンド」からの脱却を期していたドビュッシーにとって、この「海」は練りに練った自他共に認める傑作でなければなりませんでした。そして生まれたのが、西洋音楽の方法論をひっくり返し、ソナタ形式等のモデルに頼らず音楽自身が生成転化してゆくような展開のしかたや、５度の多用、エキゾティックな旋法の使用等による、全く新しい音楽だったのでありました。　　（Vn. 喜多村めぐみ）

使用楽譜：Durand
作曲年代：1903～05年３月６日
楽器編成：ピッコロ１、フルート２、オーボエ２、コール・アングレ１、クラリネット２、ファゴット３、コントラファゴット１、ホルン４、トランペット３、コルネット２、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ドラ、トライアングル、グロッケン・シュピール、ハープ２、弦５部

より多彩な表現力のために

フランス音楽の伝統とは、明晰さ、エレガンス、単純で自然な朗唱につきる、と言ったのはC. ドビュッシーですが、これほど新響が得意としてきた音楽的表現と対極にあるものはないでしょう。繊細な感情によってでなく、力によって表現できる曲以外は現在の新響には無理との意見もあります。

新響が表現し得たもの、表現し得なかったものは何か？――今新響は改めて、オーケストラの基本的な能力を見直して、且オーケストラの魅力をより幅広いものとするためにさらに多彩な表現能力を自らのものとしたいと考えています。これを実現する計画の一環として、前回はフランス音楽の入門編として多少力で押切れる「ダフニス」、今回は近代フランスの代表的名作「海」、次回はオーケストレーション洗練の極致である「スペイン狂詩曲」と、フランス音楽に取組んでいます。

そしてその成果が、ベートーヴェンやマーラーや邦人作品の演奏にも明確に表われるようになれば良いのですが。　　（Va. 奥平　一）

ルトスワフスキ 「オーケストラの為のコンチェルト」

●概説

「これがルトスワフスキだ」というようなこの作曲家が真に自己を確定し、充実した創造活動を展開するのは、1958年以降のことである。即ち12音技法による「葬送の楽」(1958年)、不確定性を導入した「ヴェネツィアの遊戯」(1961年) らを皮きりに、その後彼独特の前衛精神に満ちた一連の作品が生まれてくるのである。

それ以前の彼は1945年に PWM より民謡に基づくピアノ曲集を委嘱されたのを契機に、民族的傾向を持つ作品を書き継いでいた。詳しくは後頁の解説にゆずるが、この時期の彼の作風が集大成された曲が今晩演奏される「オーケストラの為の協奏曲」であり、民族的素材に基づく一連の作品を必ずしも高く評価していない作曲者自身をして、自らの最重要作と言わしめているほどの名曲である。

●作曲の経過

1950年、ルトスワフスキは創設間もないワルシャワフィルハーモニー管弦楽団の音楽監督であるロヴィツキより、演奏技法上至難でなく、かつオーケストラの機能を最大限に発揮するという条件で新作の委嘱を受けた。この曲が演奏技法上至難でないとはとても考えられないが、ともあれ4年という長い年月をかけて曲は完成された。余談であるがルトスワフスキはワルシャワ音楽院に入学する前の2年間 (1931年～1932年)、ワルシャワ大学で数学を学んでいる。又、1939年にはドイツ軍の捕虜となったが収容所から脱走し、ワルシャワまでの400kmを逃げおおしたという経験を持っている。このように博学多才、かつ根性のあるルトスワフスキのことであるから、完全に満足のいく作品ができあがるまで、推敲に推敲を重ねたのであろう。

またこの曲はロヴィツキに献呈されている。

●作品考察

ルトスワフスキはまぎれもなく現代に生きる作曲家である。単に曲だけ聞いていると親しみやすい旋律が出てきたり派手であったりしてなかなか楽しく聞くことができる。しかしひとたびスコアを見ると、そのような楽しさは、決して特殊な奏法こそ要求していないが極限までの可能性を追求された楽器の用法・音色の追求、そして独創的な和声により生み出されていることがわかる。紙面の関係上多くを語れないのは残念であるが、今晩きちんと演奏しさえすれば、聴きに来て頂いた方々に「20世紀の響き」をお届けすることができるであろう。

またルトスワフスキは自身、影響を受けた作曲家として、ドビュッシー、ルーセル、バルトーク、ストラヴィンスキー、ヴァレーズらの名前を挙げている。「オケコン」が彼らの影響大である解説もあるようだが、決してそんなことはない。「オケコン」は、ルトスワフスキのオリジナリティーによって生まれた作品である。

●解説

曲は全3楽章から成る。

第1楽章　アレグロ・マエストーソ

「序曲」(INTRADA) の標題を持つ172小節の曲。ほぼABA′の形式と見ることができる。拍子も一慣して8分の9拍子である。Aではティンパニが、そしてA′ではチェレスタが休みなく $fa^{\#}$ の音を打ち続けるのが大きな特色である。

第2楽章　ヴィバーチェ

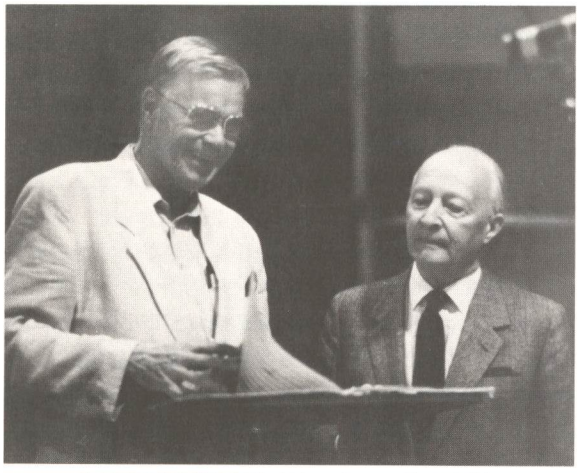
「カプリッチョ・ノットゥルノ・エ・アリオーソ」と題されている、スケルツォに相当する楽章。この楽章もABA′形式である。A及びA′の部分は4分の3拍子を基本に時折4分の1拍子がさしはさまれる。中間部は4分の9拍子となり、鋭いながらもややおおらかな楽想があらわれる。

第3楽章

「パッサカリア・トッカータ・エ・コラール」と題される全曲の約半分を占める長大な楽章。「パッサカリア」の部分は4分の3拍子、ニ長調の主題が繰り返され次第に盛り上がっていく。2分の3拍子で始まる「トッカータ」では、アレグロ・ジュストの指定のもと、激しい音楽が続いていく。それが静まると「コラール」となり、木管→金管→弦の順で感動的なコラールが静かに奏される。いくぶん牧歌的な感じもするメロディーだ。この部分が終わると今まで登場した楽句や新しい楽句が錯綜しつつ曲は盛り上がっていき、その最大の頂点でコラール主題が金管群によって最強音で奏される。圧倒的クライマックスのあとはプレストとなり、曲の冒頭と同じく $fa^{\#}$ のユニゾンで曲を閉じる。　　(Perc. 桑形和宏)

作曲年代：1950年～1954年
初　　演：1954年11月26日　ロヴィツキ指揮ワルシャワフィルハーモニー管弦楽団
出　　版：1956年　PWM
楽器編成：フルート3 (ピッコロ持替2)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット3 (バス・クラリネット持替1)、ファゴット3 (コントラ・ファゴット持替1)、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、テューバ1、ティンパニ4、小太鼓2 (響線付き1、響線無し1)、響線無しの小太鼓3 (ソプラノ・アルト・テノール)、テナードラム1、大太鼓1、シンバル3、タムタム1、タンブリン1、木琴1、グロッケンシュピール1、チェレスタ1、ピアノ1、ハープ2、、弦5部 (ディヴィジで用いられることが多い)

ルトスワフスキの道



ルトスワフスキ近影（右）：フィッシャー＝ディスカウと

第２次世界大戦まで

ヴィトルド・ルトスワフスキは1913年、ポーランドのワルシャワに生まれた。楽才のあった父親の影響で、彼自身も６歳からピアノ、続いてヴァイオリンを学び、９歳で作曲を試みている。1931～32年ワルシャワ大学で数学を学んだが、32年にはワルシャワ音楽院へ入学して、作曲を少年時代から師事していたマリシェフスキ（リムスキー・コルサコフの弟子）に、ピアノをレフェルトに学んだ。1937年に卒業し、ピアニストとして活動しながら翌38年には最初の大作“交響変奏曲”を作曲し、留学を望んでいたが、1938年のナチス・ドイツのポーランド侵入に始まる第２次世界大戦により実現不可能となった。有史以来たびたび隣接強国の脅威にさらされ続け、1795年にはロシア、プロイセン、オーストリアに分割され130年間祖国滅亡の悲劇にみまわれたポーランドにおいて、民族の文化は結束の証として正に人々の生命そのものだった。民族絶滅の危機に瀕した第二次大戦中もドイツの占領下、自国の音楽が一切禁止される中で、地下抵抗組織によって作曲、演奏、そして教育、出版などが多くの犠牲を払いながらも続けられ、ルトスワフスキも動員されて通信放送関係に従事する傍ら、抵抗組織に参加し、パヌフニクと共にピアノ二重奏“パガニーニの主題による変奏曲”（1941）を初演する等、自らの音楽を守り続けた。

第２次大戦の終結とともに彼は作曲に専念するようになり、1947年には41年に着手した“交響曲第１番”を完成、この頃の彼の作風はバルトークとストラヴィンスキーの影響を強く受けた民族主義的かつ新古典的なものだった。

一方、ソヴィエト社会主義体制の影響の下、1949年の全ポーランド作曲家、批評家大会で「内容においては社会主義的、形式においては民族的」という社会主義リアリズムの方針が確立され、革新的立場が排除されるとともに、ようやくとり戻した国家の平安の中での民族意識の高揚と相まって、多くの作曲家が民俗的色彩の濃い作品を発表した。ルトスワフスキもまた、ソプラノと管弦楽のための“シロンクス３部作”（1951）、ピアノ曲“牧歌集”（1952）など、民謡と結びついた作品を書きながら自らの作風を高めてゆき、その頂点をなすものが今回演奏する“管弦楽のための協奏曲”（1954）である。この曲はこの時期のポーランド音楽の中で最高傑作と評価され、彼自身も自らの作品の中での重要作の１つと位置づけている。

しかし同じ年、フランスではブーレーズが“ル・マルトー・サン・メートル（主のない槌）”を作曲し、ポーランド音楽界には世界の動向から立ち遅れているという懸念が生じ始め、若い世代を中心に西欧の新らしい技法への関心が高まっていた。

音楽界の「雪どけ」

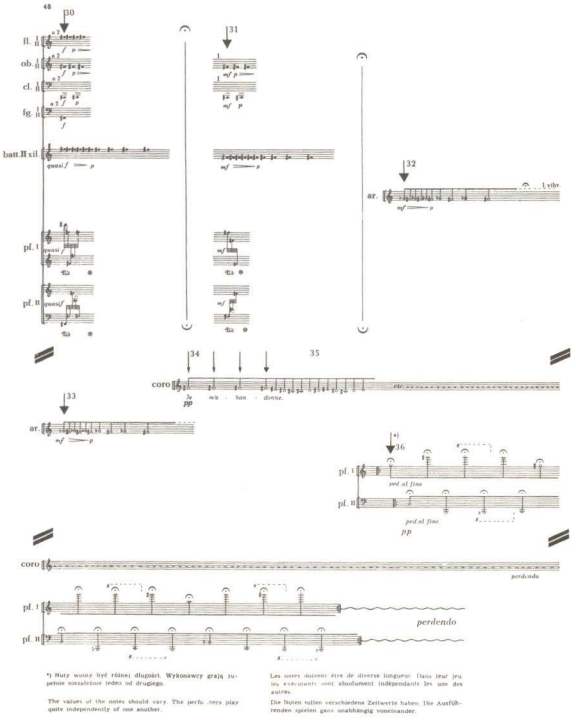
1956年のスターリン批判に端を発した、いわゆる「雪どけ」は音楽の分野にも及んで、堰を切った様に西欧との交流が始まった。1956年10月には国際現代音楽祭“ワルシャワの秋”が開催され、西欧現代作品と自国の新作の紹介の場として、ポーランド音楽の発展に寄与し、今日では世界でも第一級の音楽祭となっている。また57年にはワルシャワ放送局に電子音楽スタジオが設置され、58年には新技法の作品を募る青年音楽家コンクールが開始された。ルトスワフスキは1958年の第２回ワルシャワの秋において弦楽オーケストラのための“葬送音楽”（1958）を発表。「バルトークへの追悼」という副題を持ち12音技法で書かれたこの曲は、文字通りそれまでの民族主義的作風への訣別を宣言するものだった。60年頃になると彼に続くペンデレッキ（1933～）、バイルド（1927～）らの若手の他、より年長のシャベルスキ（1890～1979）らも、続々と前衛的作品を発表し、ポーランドの音楽は一躍世界の注目を浴びるようになった。

偶然性のこころみ

1961年、ルトスワフスキは西独ダルムシュタットの夏期講習において、ジョン・ケージの偶然性の音楽を知り、「自分の中の火薬だるに点火するスパークとなった」と語るほどの衝撃を受け、以降偶然性の技法を導入することとなり、最初の作品が室内オーケストラのための“ヴェネツィアの遊び”（1961）だった。

1963年レガメイは「この８年間にルトスワフスキ、ペンデレッキ、グレッキ、セロッキ、バイルに代表される“ポーランド楽派”が形成され、西欧前衛派との遅れを取り戻しただけでなく、大胆さ、独自性という点で遙かに凌駕した」と語っている。中でも最年長のルトスワフスキは抜きん出ており、偶然性の技法をさらに進めた20の声部と管弦楽のための“アンリ・ミショーの３つの詩”（1963）は彼の代表作となり、不動の名声を得た。その後も常に斬新な手法をとり入れながらも決して技巧のみに陥いらない新鮮で個性的な音楽を書き続け、昨年のワルシャワの秋ではヴァイオリンと管弦楽のための“チューン第２番”（1985）が演奏されている。国家賞（1964、78）、クーセヴィッキー賞（1964）などの内外の受賞作品も多く、また1986年にはフィッシャー・ディスカウを独唱者にベルリンフィルを指揮して“眠りの空間”（1975）をレコーディングするなど、自作の指揮もしばしば手がけている。各国の音楽学校や講習会などで教鞭をとるほか、国際現代音楽協会の副会長もつとめ、欧米各国の科会アカデミーの会員に選ばれるなど、その活動は多岐にわたっている。

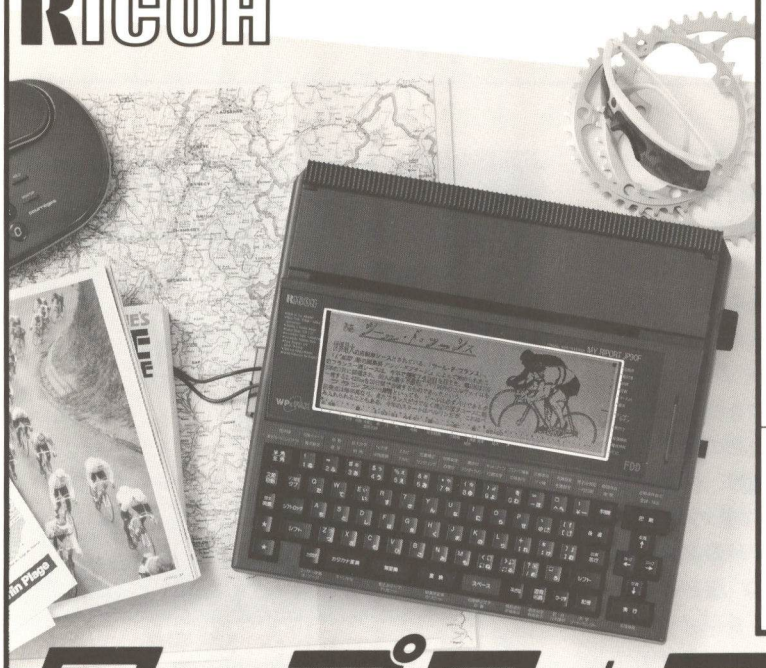
ポーランドの音楽の短期間でのめざましい発展は、不幸な歴史の中でいかなる抑圧にも屈しなかった激しいエネルギーが、創造の自由をかち得ていっせいに花開いたものといえるが、その中でルトスワフスキが不断の努力と旺盛な研究心をもって新しい道を切り開き、より若い音楽家たちの主導的役割を果した功績は大きく、ポーランドのみならず、世界的にも今世紀最大の作曲家の１人に数えられている。（Perc. 上原　誠）



“アンリ・ミショーの３つの詩”の最後の部分



RICOH



リコーだけの
ファクス機能つき
ワープロ、WP&FAX
新登場です。

ファクス機能のついたワープロだから、
❶ワープロで文書を打つ。
それを❷ファクスで送る。
さらに❸ファクスを受ける。
この3つの仕事を、1台でやってのけます。

日本語ワードプロセッサ
My-RIPORT
JP90F 本体標準価格 138,000円

ワープロ＋ファクス

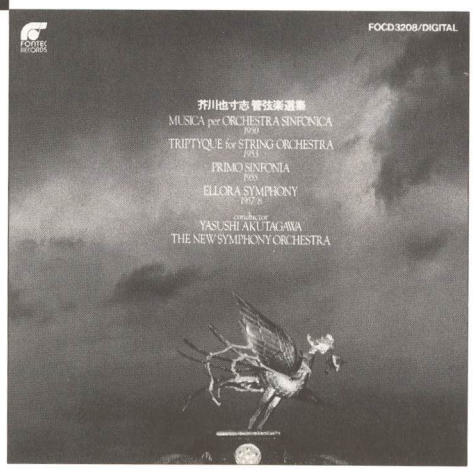
〒107 東京都港区南青山1-15-5 Tel.03-479-3111㈹ リコー

芥川也寸志
管弦楽選集

好評発売中

日本を代表する作曲家 芥川也寸志 1950年代の代表作4曲を収録

●作曲者自身の指揮による最新デジタル録音



CD ONLY

交響管弦楽のための音楽 (1950)

弦楽のための三楽章
——トリプティーク (1953)

交響曲第一番 (1955)

エローラ交響曲 (1957/8)

芥川也寸志(指揮) 新交響楽団
(1986年11月30日・東京文化会館大ホールにおけるライブ録音)

FOCD3208/DIGITAL
¥3,200

FONTEC RECORDS
発売元 株式会社フォンテック
〒167 東京都杉並区荻窪5-22-5
☎03-393-0183



JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川也寸志
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)502-6551